

かわいいそうじゃない

小川 愛 奏

マーシャのパパとママは仕事で帰りがおそいので、マーシャはいつも学校が終わったからおじいちゃん、ジョージの家に帰ります。ジョージに宿題を見てもらって、ピアノも聞いてもらって、暗くなってから家に帰ります。

月曜日にマーシャが学校から帰ったら、ジョージがにわで木を切っていました。「マーシャ、来てみな。チョウチョのサナギがあるよ」

ジョージが言うのを見てみたら、アベリアの木のおだにサナギが一つ、ついていました。お母さんにタオルでくるまれている赤ちゃんみたいだなあと、マーシャは思いました。

ジョージは、サナギのついたえだを切りとってくれました。マーシャは、それを持って家に入りました。二階に大きな虫かごがあるのを思い出したので。それは、夏休みにジョージと近所のはんべ

い山でカブトムシを三びきとったときに使った虫かごです。

サナギのついたえだは、虫かごにびつたりおさまりました。サナギは、ねて生るみたいでした。どんなチョウチョが生まれるのか楽しみです。

虫かごは、ジョージの家においておくことにしました。マーシャの家には昼間だれもいないので、生まれたときに、とんで行けないとかわいそうだと思っただけです。

二日後のことです。

マーシャが学校から帰ると、虫かごの中にアゲハチョウがいました。生まれたのです。

ところが、そのチョウの左の羽は丸めた紙みたいにくしゃくしゃだったのです。「羽が開かなくてなあ。羽化にっばいしたんやなあ」

とジョージが言います。

「この子、とべるかなあ」

「さあ、むずかしいかもしれへんなあ」

とべないかもしれないアゲハチョウ。かわいそう。虫かごの中より、外のほうがよこぶだろうと思つて、にわに出してやることにしました。

アゲハチョウは、やつぱりとべません。でも、自分で工夫して、歩くことはできました。それで、みつがすいやすいように、アリッサムの花の上においてやりました。

「せっかく生まれてきたのに、かわいそうやなあ」

マーシャがつぶやくと、ジョージは「しぜん界は、きびしいなあ」と言いました。

仕方がないのかもしれない。でもマーシャは、やつぱりかわいそうでした。次の日、マーシャは学校から帰ると、「ただいま」を言う前に、にわのアゲハチョウに会いに行きました。アゲハチョウは、まだ、アリッサムの花にいました。その次の日は、下校とちゅうに雨がふり出しました。アゲハチョウが心配に

なって、マーシャは友だちのチェリーちゃんをおいて、一人で走って帰りました。

にわのアリッサムの花の上には、百ぎんの安物のかさが開いておいてありました。アゲハチョウに雨が当たらないように、ジョージがかぶせてくれたのです。

アゲハチョウが羽化して四日目。秋の風が気持ちいい日になりました。

ジョージにかけ算の宿題を教えてもらってからピアノをひいて、帰るときはもう外が真っ暗でしたが、半月が出ていました。マーシャは暗いのがこわいので、ジョージに手をつないでもらって家まで送ってもらいます。ジョージの家からマーシャの家までは十分くらいで着きます。

「あのアゲハチョウ、好きな花のミツさえへんし、羽がかたつぽ開かんから、かわいそう」

マーシャは、ジョージに言いました。すると、

「マーシャもかた手がなかつたら、どうする」

と聞き返されました。

うくん、どうするかなあ。マーシャは考えます。

ある方のかた手で服を着て、かた手で顔を洗う。字も書く。ランドセルだつて、工夫してせおう。仲よしのチェリーちゃんと「今日の給食のスパゲティおいしかったね」つて、しゃべりながら歩いて帰る。かぜをひいたら、かた手ではなをかむ。ふとんだつて、かぶれる。大すきなママとぎゆうもする。かけっこもする。食べるのだつてできる。できることは自分でやる、とマーシャは思いました。だから、

「ふべんだけど、ふべんじゃない」と答えました。ジョージがまた、

「かわいそうやねえ、と言われらどう？」と聞いてきました。

「それは……それはちがう気がする」
マーシャは強い声で言いました。

アゲハチョウは、五日目にも動かなくなりました。死んでしまったのです。

「このアゲハチョウは、メスだよ」
とジョージが言いました。ええっ、とマー

シャが顔を上げると

「羽の黄色がこいやる」と言うのです。

マーシャは、自分と同じ女の子だったアゲハチョウのために、アリッサムの葉っぱと葉っぱの間に穴をほりました。「いっしょうけんめい生きて、えかったね」

そう言つてうめてあげました。

土の中から、かた羽の黄色いアゲハチョウが空に向かってうれしそうに元気よく羽を、うちわみたいにうごかして、とんでいくのを見たような気がしました。